

---

# 三界紀

飴色蝸牛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三界紀

### 【Nコード】

N3274T

### 【作者名】

飴色蝸牛

### 【あらすじ】

人類が宇宙への道を失い幾星霜の時が流れたとある惑星、葦原。閉ざし閉ざされた世界で、自分の道を持たずにいる少年は見知らぬ土地で何を見て何を思い、そして何を為そうとするのか。

## 中天の町で1（前書き）

この作品は以前投稿して挫折した作品「幻想大陸鉄騎録」をもう一度一から練り直して投稿したものです。

そのためキャラクター設定や地名に似たものや、大きく異なるものが有りますが、どうかご了承下さい。

## 中天の町で1

### 幻想大陸鉄騎録

#### 第一章 大陸の堅塁

快晴の空の下、海面は朝の陽射しを照り返している。

水面に波が揺れるたび、陽光が数多の煌きを作る。

遠くから気笛に混ざり、重々しい駆動音が聞こえてくる

下腹に響く音は徐々に近付き、やがて大きな影を海面に落としてその音の主が姿を現した。

現れたのは、空に浮かぶ一隻の船。

飛翔艦と呼ばれる今は製法すら喪われた、星の海を渡ったという伝説をもつ船の遠い末裔。

古代の遺跡から復元された龍脈炉を動力とする重力制御機関の働きで海だけでなく空をも渡る飛翔艦は、今日も多くの人と荷を運ぶ船体が大気を割って発生する水蒸気と補助動力の生み出す煙が白波の様に空に航跡を残しながら、敷島本土と大陸を結ぶ連絡船は大陸、瀛州南端の港湾都市大豊に向かい走る。

崑崙大陸の東、金雀半島の根元に存在する瀛州は島国である敷島皇国が大陸に持つ唯一の自国領土である。

かつての第十九次征東遠征の際、賠償として貰い受けたその地は大陸の国々の文化の流入地点となっている。

「乗客の皆様、当船は予定通りの航路をとり、間もなく大豊港へ寄港します。つきましては停泊のため空中航行から海上航行へ移行します。着水時の振動にご注意ください」

船内に聞こえる放送が到着まで間もない事を告げる。

それほど時間も経たずに船体が海面についた音とわずかに浮き上がる様な感覚がおこり、続く揺れが、船が埠頭についた事を知らせる。

揺れが収まり、荷物を抱えた乗客たちが立ち上がる中壁にもたれていた少年も動き出す。

少年 石上和真は今年で十六。敷島では成人と認められる年齢だが、それを考慮しても幼さの残る顔立ちをしている。

軽く伸びをし、鞆の紐を肩に掛けると、船から降りる人の流れに加わる。

船から降りた者を迎える人々の中をきよろきよろと見まわしながら和真は進んでいくと、人混みから少し離れた場所で堀に背をもたれ腕を組む敷島人の男を見つける。

「先生！」

呼び声に気付いた男、敷島の実権握る大豪族の一つ、物部家の直参で皇土にいた折に和真の武術の指南役、久米典明は堀から離れると駆けてくる和真に向かって歩いて行く。

「久しぶりだな、和真。本家の方々は、変わり無いか？」

「父さんも兄さん達も、相変わらずです。先生も元気そうで何よりです。」

そうか、と相槌をうち久米は近くにある辻馬車の停留所へと歩きます。

敷島を含む東方諸国ではガソリンエンジンを積んだ自動車があまり普及していない。そのため物好きの富豪や豪族を除けば、陸路での長距離の移動手段は馬車が主流だ。

「しかし本当に身一つで来るとはな。仮にも物部家の係累が供も連れずに来るとは不用心が過ぎるぞ。」

歩きながら、和真の身なり 丈夫さを優先した簡素な旅衣と肩掛け鞆一つを見て半ば呆れる様に久米は呟いた。

その服装もあつて少し目を離せば雑踏の中に溶け込んでしまう様な容姿の持ち主の和真は曖昧に笑う。

「大丈夫ですよ。道中何も無く来ることができましたし、それに一人の方が動きやすいので。」

「そうは言つてもだな……。」

まだ何か言いたげな久米の言葉を遮る様に和真は言葉を続ける。

「それに、先生もご存じの通り今の僕には物部家の家督を継ぐ権利は有りません。いや、敷島の官職に就くこともできない身です」

物部家先代当主、物部季孝すえたかが妾との間に設けた三人目の子である和真は四歳の時、父季孝を狙う刺客の襲撃を受け母と、家族同然に暮らしていた人々を眼の前で殺された。

その光景は幼い和真から言葉を奪うには十分すぎるほどの傷を心に残した。

心を病んだ和真は物部家の家督を継ぐ権利を永遠に失い、物部家地下の座敷牢に幽閉された。

指南役を買つて出た久米や世話役の者の献身的な助けが無ければわずか二年で和真が人の言葉を取り戻す事は無かつただろう。

しかし一度は社会的に死んだ身となつた和真の処遇については当時親族の中でも物議をかもした。

最終的に和真は、物部家の家督相続権の放棄と国内の一切の官職に就かない事を条件に断絶していた譜代豪族、石上の姓を名乗り日の下で暮らす事を許された。

そんなわけで兵部省が軍幹部を養成する目的で設立した防衛大学寮の記念すべき第一期卒業生でありながら和真は、同期の仲間達が各地の国司や郡司の下に配属される中でただ一人どこにも配属されずにいた。

現当主の信孝のぶたかが半ば強引に親戚筋を説得して瀛州軍の人型機動兵器、通称『鉄騎』の運用部隊に回してくれなければ、今も防衛大学

寮で教官の手伝いと言う名の雑用を続けていただろう。

「まあ、先代様も信孝様もそういう御仁だからな。お前が似ても仕方ない。」

「何を言いますか。影響を与えた度合いで言えば先生の方が大きいと思いますよ。」

久米は嘆息し、客待ちをする馬車の一つに向かう。

雑談に興じ煙草を吸う馬丁に混ざり、敷島軍の飛行服を身に纏う銀髪の青年がぐったりとした様子で道端に寝転がっていた。

「連れて来たぞ淳也。こいつだ。」

「おう、こつちもだいぶ回復した所だ。」

飛行服を着ているということはこの人は機竜乗りなのだろうか、上着をだらしなく羽織った男を見ながら和真はそんなことを考えていた。

久米が近寄り呼びかけると、淳也と呼ばれた男は気の抜けた返事と共に、生気のない顔で起き上る。

「相変わらず酷い顔だ。吐くなら向こうでやれ。」

へいへいと生返事を返しこちらを見返す淳也と呼ばれた男に対し和真は慌てて敬礼をする。

「よう、お前が新しくこつちに来た奴か。俺が瀛州軍第三小隊隊長、池上淳也だ。俺がお前の直接の上司になるわけだが、まあ、よろしく頼むぜ。」

「い、石上和真であります！」

「はは、そう構えるな。瀛州軍じゃあこんな物もんただの飾りだ。」

針で引っかいた様な細目を更に細め、襟元の旅帥を表わす一つ星の階級章を指で弾き、握手を求めるように和真に手を伸ばす。

飾った雰囲気のない淳也の態度に不快ではない戸惑いを感じつつ和真は握手を返す。

和真の腕を支えに年寄り臭い掛け声とともに淳也は立ち上がる。

中背の和真と並ぶと頭一つ分は上背がある。

近くにいた馬丁の一人に瀛州国衙まで乗せてくれと言っている久米のもとに向かうと淳也は辻馬車を示しげんなりした様子で話しかける。

「典明よう、帰りもそれに乗るのか？歩いて行かね？」

「まだ寝惚けてるのか？これから国衙の奴らとの顔合わせもあるのにそんな悠長なことをしてられるか。」

「大将も含めてそんなのいちいち気にする奴うちにいないだろ。」

けんもほろろといった調子の久米に対しぶちぶちと不平をこぼしながらも押し込められるようにして馬車に乗った淳也は恨めしそうに久米を睨む。

「気にする奴がないのは遅れていい理由にはならん。第一、そこまで乗り物が嫌なら来なけりゃいいんだ。」

「あの、失礼しますが瀛州軍の方でしょうか？」

久米が文句を言う淳也を馬車に押し込めようと悪戦苦闘していると、港湾警備の制服を着た者が声をかけてきた。淳也を馬車の中に蹴り入れ久米が振り向いて答える。

「その通りだが、どうした？」

「いえ、ちよつと気になるものがありまして、出来れば詰所の方に来ていただきたいのですが。」

「分かった！」

久米が何か言おうと口を開く前に馬車から飛び降りた淳也が返事をする。そのまま文句を言われる前に一気にまくし立てる。

「国内の治安の維持は瀛州軍おれたちの仕事だ。それに新入りに仕事を覚えさせるまたとないチャンスだ、そうだろ久米？」

なる程それなりの筋は通っている。久米は溜息をつきこちらを見ている馬丁に乗らないことを伝え、無駄な時間を過ごさせた詫びとして指定された運賃の半額を渡す。

「貴様の乗り物嫌いもここまで来ると尊敬に値するな」

「別に乗り物が嫌いな訳じゃねえ、音速超えねえ乗り物に弱いだけさ」

「あんまり変わらないと思いますよ？」

「というかアンタそんなんで機竜乗りの隊長務まるのか、ああ機竜は音速超えるからいいのか。」

突っ込み所しかない乗り物酔いについての淳也の持論に反論を試みようとする和真を一瞥し、久米も頷く。

「わかった、案内してくれ。……和真、行くぞ。貴様の初仕事だ」

「あ、はい！」

警備員の案内で歩き出す久米達に歩調を合わせ和真も付いていく。

## 中天の街で2

「不審船ですと？」

成人して以来皺の寄らなかつた日は無いと自覚している眉間を訝しげにひそめ久米は尋ね返す。

詰所の椅子に腰かける人の良さそうな警備主任は額に暑さからではない汗を浮かべる。

「さつきから幾度も無線での通信を試みているのですがどうにも応答がないのです」

港湾警備の職員に案内され、詰所の奥に通された和真たちを待っていたのは大豊沿岸を遊弋ゆうよく中の哨戒艇が船籍不明の船舶を発見したという報告だった。

度重なる停船命令にも関わらず問題の船は速度を落とす様子もない。

「いかんせん警備の手の者もこちらに来て集めたばかりの新人でして、万一抵抗された際上手く動けるか不安なので……」

気の小さそうな態度で口ごもる、恰幅の良い中年の言葉に和真は納得する。

敷島の多くの国では、港などの主要な民間施設の警備等を担うのは兵役を終えた庶民である。

兵士としての訓練経験を持つ者達は決められた兵役年数を終えた後も安定した収入を得る為このような職場に就職する事が多い。

しかし瀛州は近年敷島の領土に編入されたばかりの土地であり、徴税と徴兵の為に必要な戸籍や人口、田地の調査も群によってはまだ不十分である。

当然各地の郡司もとの瀛州軍も慢性的な人手不足に陥っており、兵を他に回す余裕が無い。

敷島本土と大陸の玄関口である重要拠点である大豊港を守る兵の

練度の低下は、そんな現状がもたらした結果ともいえる。

「つまり、経験の浅い素人の代わりに正規兵に不審船の拿捕をやつて欲しいってことか？」

詰所の備品らしい双眼鏡をいじりながら淳也がつぶやく。

凶星を指され主任の額にまた汗が浮く。

「あくまで保険としてです。何も起こらずに済めばあなたがたはここにいて下さるだけで結構です」

言葉を遮るように沿岸の哨戒艇からの無線が届き、受け取った警備兵の表情が青ざめる。

漏れ聞こえる鋼板を打つ銃弾と、緊迫した声で伝えられる報告が何も起こらずに済まなかったことを伝える。

和真は久米を見やる。

「ここにいるだけでは済まなくなりそうですね」

「全くだ」

肯定の意味で首を振り、青褪める椅子の上の男に声をかける。

「雁見の烽かりみ とぶひに連絡し、瀛州国衙への応援要請を求めてください。そ

れと、大豊には哨戒艇が三隻あつたはず。艇ふねを動かせる者と哨戒艇一隻を貸していただきたい」

中天の街3 (前書き)

遅くなってしまう申し訳ありません。

### 中天の街3

大豊に泊まっている船は皇土からの貨物や人を運ぶ客船や貨物船である。

そういった大型船を鯨に例えるなら港湾警備の哨戒艇はさながら小さなコバンザメの様にも見えなくもない。

しかし彼らの乗る哨戒艇はおこぼれにあずかろうとするコバンザメ等ではなく、巨大な鯨も恐れ慄く海の番人である。

「無線を受けてから既に四半刻は経っています。急がないと」

にきびがまだ残る警備兵 恐らく和真よりも年下と思われる、が舵とりをしながら言うその横で無線機で呼びかけていた淳也が頭を上げる。

「今向こうから無線が来た。目標と一緒に南南東に移動しているとよ」

声からするに、あんま余裕なさそうだと呟く淳也に答えるように船は速度を上げていく。

「見えてきたぞ！」

船のエンジンの立てる音に負けじと怒鳴る久米の指す方向には旧式の中型貨物船が見て取れる。

「むこうも無事みたいだ」

貨物船を追う同じ型の哨戒艇の姿を見つけ、安堵のため息を吐く和真とは対照的に久米の表情は渋い。

「まずいぞ、やつらこのまま進路を変えずに南東に逃げるつもりだ！」

「それがどうしたんですか!？」

久米につられ和真も大声で尋ねる。

「逃げた先は琥蕃こはんの領海だ。……そうなれば手が出せなくなる。」

「そうなる前に仕留めろってこつた。……おう、わかつた。」

通信機をいじっていた淳也が立ち上がり振り返る。

「哨戒艇には航行能力を奪えるような火器は積んでいない。かとい  
つて乗り込んでいって制圧するにも抵抗が激しくて難しいらしい。」

久米の眉間に一段と深く皺が刻まれる。

「瀛州軍からは何と？」

焦りに似た感覚のままに和真が疑問を口にする。

期待できねえぞと前置きし、淳也は答える。

「鉄騎隊第二軍旅りょが今出たらしい。到着まで四半刻でところか

「蕎麦の出前か。それだけあれば奴ら悠々逃げおおせるぞ。」

「つまりはそういうことだろうよ。」

そう言つと淳也は肩をすくめ、久米は懽然ひげんとした表情になる。

「見逃せと、そういうことですか？」

訝しげに眉を顰める和真に淳也は苦笑しながら首を横に振り、首  
をかしげる和真に答える。

「つまり我らの親分が言いたいのはこのうことさ。新入りが使い  
物になるかの見極めを兼ねて、俺たちだけで何とかしろってな」

「そういうことだ、行くぞ和真」

淳也の後ろから久米が声をかける。いつの間にか持ってきたのか船  
の備品らしき長槍を担いでいる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3274t/>

---

三界紀

2011年7月23日03時13分発行